

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 神谷 智幸

神谷智幸氏の課程博士学位請求論文『現代中国語“给”の文法機能 ——動詞の直前および動詞の直後に共起する“给”の意味と機能——』の公開審査は 2019 年 7 月 6 日午後 3 時 30 分より行なわれた。審査員は、(主査) 小野秀樹、(副査) 楊凱榮、吉川雅之、佐々木勲人(筑波大学)、雷桂林(桜美林大学)の 5 名であった。

現代中国語の共通語において、“给 gěi”という語は「与える」という意味を表す授与動詞であり、また事物の受け取り手や利益を享受する者を導いて「～に／～のために」という意味を表す前置詞としても機能するが、それ以外に、“给”には文の述語動詞の直前もしくは直後に共起する用法があり、動詞や前置詞としての機能とは異なる様相を呈している。こういった“给”の文法機能とその表す意味については、現在でも辞書や研究論文などにおける記述・分析が一致しているとは言えず、“给”に関する未解決な領域と言って良い。本論文は、こういった“给”の意味と機能について新たに綿密な分析を行ない、全面的な記述と統語論および品詞論における的確な位置付けを目指したものである。

論文は第 1 部(第 1 章～第 3 章)と第 2 部(第 4 章～第 6 章)を主要な部分とし、その前後に序章と終章を加えて全 8 章で構成されている。第 1 部では動詞の直前に共起する“给”(“给 V”)について、第 2 部では動詞の直後に共起する“给”(“V 给”)について考察を行なった。

第 1 部では、先行研究において議論や分析が混乱したり比較条件が不統一であったりした点を改善すべく、考察対象となる実例を「非ヴォイス構文」と「有標ヴォイス構文」に分け、“给”の出現する文環境を整理した上で分析を進めた。

第 1 章では「非ヴォイス構文」に関する考察を行ない、“给 V”が用いられる文では動作対象(目的語)が前置された「動作対象+動作主+“给 V”」という主題化構文の語順が極めて優位であることを指摘した上で、この構文が行為の着点に志向したものであると分析した。また文の表す事態を「已然」と「未然」で分けて考察し、“给 V”における“给”が有する意味機能について「ある動作行為の実現により、話者(または話者がシンパシーを寄せる人)が恩恵を被る(未然)／恩恵を被ったか逆に不如意な思いをした(已然)と話者が主観的に認定したことを表す」という結論を得た。第 2 章では受け身や使役を表す「有標ヴォイス構文」を対象とし、“给 V”における“给”の意味機能は依然として「話者の主観的な認定」だと分析する一方で、執行使役文、受け身文、放任使役文などヴォイス構文の下位類においては「恩恵」「非恩恵」を表す状況が異なることを指摘した。第 3 章では“给 V”における“给”の文法化(機能語化)について共時的に考察を行ない、述語動詞の直前で用いられる“给”は話者の主観的態度を表す成分として、前置詞よりまな一層文法化が進んでいるが、依然として動詞“给”の有する授与義を抽象的レベルにおいて保持していることから、これを「(授受)補助動詞」という新たな品詞として認定することを提案した。

第 2 部では、従来、主として語彙の意味から分析されてきた動詞の直後に共起する“给”(“V 给”)について、新たに構文論的、語用論的観点から考察を行なった。

中国語には、英語と同様に間接・直接の二つの目的語を同時にとる二重目的語構文が存在するが、そこには授与動詞単独のものと“V 给”を用いたものとが併存する(e.g. “我送他

一双鞋”／“我送给他一双鞋”[私は彼に靴を1足あげる])。第4章では、両者の違いについて、間接目的語のみをとる実例(“送／送给＋ヒト”)にも着目し、「ヒト」名詞の定性の差や直接目的語に関する意味的な制限の違いについて従来には無かった指摘を行なった。第5章では、本来“V 给”が成立しにくいと指摘されていた、非授与義を表す動詞(取得義や、やりもらいに無関係な動詞)と“给”との共起について考察し、コーパス調査に基づいて、そういった意味の動詞であっても「名詞化」「連体修飾」「使役」という特定の構文環境に入れば、“V 给”を構成する実例が少なからず存在することを指摘し、同時に、この種の“V 给”を成立させる条件として、動作対象が既知・既出のものであり、情報伝達上その対象を生じせしめた具体的行為を言語化することが必要な状況にあるという発話環境が大きく関与することを指摘した。第6章では、直後に“给”をともなう動詞全般について、従来の分析の問題点を挙げつつ、「事象叙述」「属性叙述」という新たな基準を用いた上で分類を行ない、当該の動詞は「事物移動型」「事物授受型」「事物入手型」「行為実演型」の4種に分けられることを指摘した。以上の考察を経て、動詞の直後に“给”をともなう構造は、継起性や行為の関与性などに差があるものの、すべて連動構造に属するものだという新たな分析を提示した。これにより、動詞の直後に共起する“给”は、直前に共起する“给”よりも動詞性が高く保持されており、文法化の面からは動詞と前置詞との間に位置するものであると結論付けた。

本論文の最も大きな成果は、従来の研究において見解が分かれていた、動詞の直前と直後に共起する“给 gěi”の文法機能と意味について、非常に整合性の高い分析を行なったことであり、かつ、それらを動詞と前置詞との関連を踏まえつつ文法体系的に適切に位置付けた点にある。本論文が提出した種々の指摘や発見は、中国語におけるモダリティ研究、および二重目的語構文や連動構造といった各種構文の研究に対しても大きく貢献するものであると認められる。審査会においては、本論文が提示した新たな分析結果と結論に対して大きな異論は出ず、すべての審査員から賛意が表された。コーパス調査による丁寧な実例の分析に基づいた本論文の考察は、中国語母語話者の研究者では見落としがちな言語現象についても細かく検証をしており、説得力のある議論を展開しているという高い評価を得た。また、さまざまな文脈を考慮し、あるいは想定することで、従来、文の単位だけで成立するか否かが論じられてきた構文に対しても、実例に基づく幅広い分析によって、より全面的な考察を展開することに成功しているという評価も得た。一方で、理論的な説明に関して引用が適切でない部分があること、文法用語の用い方に一部問題があること、データの数値の読み取り方に些か正確ではない箇所があることなどが指摘された。しかしこれらの問題点は本論文の学術的価値を損ねるものではない。よって、本審査委員会は、全員一致で本論文を博士(学術)の学位を授与するに相応しいものであると認定した。